

論文の内容の要旨

神を欲望すること

ニュッサのグレゴリオスにおけるパトス概念の可能性—

柳澤田実

本論文は、四世紀のキリスト教教父ニュッサのグレゴリオスの思想を、*pathos* という概念を中心に読解し、また、その読解を通じて、この概念自体が持つ可能性について考究したものである。*pathos* とは、神と人間との間隙を埋める何ものかとしてグレゴリオスの思索の随所に登場する広範な意味内容を持つ概念である。それは、神の人間に対する先行的愛の発露である受肉・受難であると同時に、神の愛に対する人間側による受け容れとしての人間の可変性、諸感情でもあり、更には神の愛に対する積極的応答である欲望でもあるとされている。

グレゴリオスによれば、神は、知性的把握によっては決して捉えることはできない。しかしその神が受肉した神として到来することによって、神は人間によって欲され、愛され得る対象となる〔第一章〕。人間が神を欲望の対象とする契機は以下のように論じられている。すなわち、人間は、神をある種の形・イメージ (*eidos*) として捉え、その形に欲望を抱き、神に向かって超出してゆくことになる。この複数の *eidos* は、神の働き (*energeia*) であるとされる。そして、その個別的な働きを感受するものとして、人間には通常の身体的な感覚と異なると同時にそれと類似的な「霊的感覚 (*aisthesis pneumatike*)」が備わっているとグレゴリオスは述べる。この神の *eidos* には、万物に潜在する神の働きも含まれるが、それ以上に重要なものとして、受肉し受難した (*pathein*) イエスの姿 (*eidos*) が挙げられていた〔第二章第一節〕。十字架上で死する神を美しいものとして愛すること、しかも不断に愛し続けることこそが、人間の神への超出を可能にするのである〔第二章第二節〕。そして、この超出によって人間は神に似たも

のへと本性的変容を始め、本来神を映す鏡のような自らの本性を復元してゆくのだが、こうした神への変容を可能にする可変性もまた、*pathos* という言葉に含意されるものであった〔第一章、第二章〕。

以上のように死すべき神を愛するためのトポスを、グレゴリオスは、「幕屋」という象徴に託していた。そして本書の分析において確認されたのは、このように神の死を悼むトポスは、単一の物語連関に回収されぬまま、語り得ぬものとして留まり続けるということである〔第三章第一節〕。また、このように死すべき神を愛することは、自らの欲望や諸感情 (*pathos*) を陶冶することを通じた神の死と復活への参与 (*metousia*) と言い換えられてもいたが、この神の死への擬似的な参与という概念装置は、死それ自体への接近し難さという、おそらくはグレゴリオス自身の肉親の死という私的経験とプラトンの『パイドン』読解を通じて創出されたことも確認された〔第三章第二節〕。

このように *pathos* は、神と人との間にまたがる中間領域を、様々な位相において埋めてゆく役割を担っていた。しかし、このことは、神と人との格差・差異が完全に埋められ得ること、あるいは両者の関係が固定的で閉鎖的な関係に尽きることを意味するわけでは決してない。本文でも述べていたように、神が把持しえない無限な存在であることこそが、人間の無限な欲望による無限な変容 (*epektasis*) の成立根拠になっている。こうした無限な神との関わりを、グレゴリオスは友愛 (*philia*) と呼び、父子関係よりも高次のものとして位置付けた。父子関係において人間の諸情念 (*pathos*) は祈りとして分節化されるが、この祈りは「全てを語ること (*parrhesia*)」として、ある種無媒介に神に伝達されるものとして保証されている。しかし、友愛においては、人間は神に一方的に「呼ばれる」ことから始める以外にない。この友愛という関わりにおいて現れる絶対的に超越する神こそ、本論文の出発点になっている把握不可能な神、しかも先行的に愛を与える神である〔第四章第一節〕。グレゴリオスによれば、このように知性認識を超えた神を体験することは、神的光の経験を超える「輝く闇」と表現される体験でもある。この撞着的表現の意味するところとは、創造の始原の無限定性それ自体の現れを経験することであり、したがってこの「輝く闇」への到達とは創造の始原への遡及になっているのであり。人間はこの体験を経て、再び創造されることになるのだが、この再創造のプロセスへと人間を媒介するのもまた、受肉し受難する神・イエスに他ならない。こうしてグレゴリオスの神認識論は、再創造論へとコスモロジカルな展開を見せるのだが、この再創造論においても神の位相から被造物の位相へと人間を媒介として *pathos* (受肉・受難) の神イエス・キリストが登場するのである。そして、このイエス・キリストによる媒介によって初めて、「目も眩むような」神体験が、人間にとって媒介可能な善として、具体的な実践を通じて(すなわち善い行いとして) 第三者にも媒介可能になる、その可能性が開かれると結論付けられた〔第四章第二節〕。

以上の議論から、とりわけ思想史的観点において、明らかになったこととして以下の二点が

挙げられる。まず第一に、グレゴリオスが、神的領域と被造的世界との中間領域に極めて意識的であり、両者のインターフェースで生じる複数の媒介作用・接触を語るためにこの pathos という概念を用いたという事実である。グレゴリオスの議論は、基本的にはギリシア哲学、とりわけプラトン及びその後のプラトニズムの概念を用いて展開されていた。実際 pathos が様々な位相で働くとき、神と人との間の中間領域の問題は、そのまま知性的世界と感性的世界あるいはアイデアと個物をいかに媒介するかというプラトニズムが抱え続けた問いに対応している。すなわち、このプラトニズム的な問いに対して、キリスト教徒のグレゴリオスは、人性と神性を媒介するものとしては神でありながら人になったイエス・キリストを、知性的美と感性的美を媒介するものとしては神の働きや人間イエスによってもたらされる様々なイメージ (eidos) を、そして魂と身体を媒介するものとしてはキリストに対して抱かれる人間の感情や欲望等を、全て pathos という言葉のもとに導入したと考えられるのである。しかもそれはしばしば「傷」「刻む」という比喩と併せて語られていたように、単に間を繋ぐというよりは、むしろ直接的で無媒介な接触として捉えられるべきものであった。

第二に重要なこととして、グレゴリオスの議論においては、規定性・限定性としての視覚的形相が第一義を占めるプラトニズムの秩序が、明らかに転倒しているという点が挙げられる。むしろ限定・規定性によっては捉えきれない事態こそが pathos という概念の下に主題化されていたのである。このようにプラトニズムにおいては否定性でしかない pathos という概念がグレゴリオスによって重用された理由として考えられるのは、彼が当時直面していた時代的要請である。グレゴリオスは、ニカイア公会議の信条「子は父と同一本質である」の熱心な擁護者であり、子であるイエス・キリストの神性のみを認める単性説を積極的に批判する立場にいた。つまり、神が完全に人になったということを説得的に示すために、グレゴリオスは、人性の持つ可変性、弱さ、可死性といったもろもろの諸性質を pathos に担わせつつ、あえて同じ言葉で神の受肉・受難について論じたと考えられる。

以上のように展開されたグレゴリオスの pathos 概念の可能性を、より開かれた射程において意義づけるならば、それは、pathos の直接性や無媒介性に見出される。グレゴリオスは、愛の矢の比喩によって、人間が、神の愛 / pathos に傷つくことで、それを「直ちに」愛してしまうという、いわば愛 / pathos の転位のプロセスについて論じていた。この無媒介性を支持する基盤となるのが、インターフェースとしての pathos である。この人間の応答的な愛には、不可避免的に、神以外のものへのあらゆる pathos の棄却・犠牲が付随するとされるが、この人間の犠牲を要請する神の受難もまた、言うまでもなく、神の自己犠牲に他ならない。以上から導きだされるのは、犠牲は、他者の犠牲をごく私的に受けることによって内発的に生じる実践以外にはあり得ず、犠牲とする対象は自己以外のものではあり得ないという結論である。この単純な結論は、しかし、犠牲とは決して第三者に媒介し得ないという結論を導き出すのではないだろう

か、徹底した二者関係においてのみ愛と自己犠牲は一体をなす。グレゴリオスの pathos が示すのはこのような愛 / 犠牲だと考えられる。

グレゴリオスが描き出した愛とは、他者である神の自己犠牲である受難 (pathos) を美しいものとして感受し、その美しき犠牲への応答として、自らを犠牲にしながら他者を愛するという pathos の実践であった。第三者に媒介不可能なこの犠牲 / 愛は、媒介された瞬間即座に、加虐的であれ被虐的であれ、ある種の暴力と化す。昨今、犠牲の問題はとりわけ宗教との関係では、極めて否定的にしか論じられないが、こうした事例はまさに第三者によって媒介された、既に暴力へとスライドした犠牲であるように思われる。犠牲をとりまく上記のような言説に対して、グレゴリオスの第三者に媒介不可能な pathos の転位の問題は、犠牲 / 愛が成立し得るトポスについての、より繊細な理解を可能にするだろう。〔了〕